（その２）

事　業　報　告　書

１．事業名　ビンテージバイクラン in TSHUSHIMA

２．事業の実施内容

(1) 実施日時・場所
・令和２年１１月２９日開催
・天王川公園

(2) 対象者及び参加人数
・運営スタッフ　７名
・参加台数３２台
・展示解説員１名
・集客数　３５００名

(3) 実施内容

天王川公園 100 周年を迎えた 2020 年、この地で盛んに行われていたバイクレースを偲び、ビンテージバイクを集めて解説付で展示し往時を懐かしむと同時にその歴史を新たに学ぶ機会を設けた。

さらには天王川オートレースの歴史やビンテージバイクを身近に感じてもらうため、一般市民・来場者による撮影会も開催した。

また、名古屋郷土二輪館の所蔵する天王川レースに関わる史料（当時の賞状、優勝旗、優勝杯、プログラム、写真など）を展示し、館長である冨成氏による解説も行った。

会場ではアンケート調査も行い、天王川レースへの認知やイベントに対する意識調査を行った。

また、記録保全の観点から新たなる史料提供への協力も呼び掛けた。

3　事業の成果（この事業によって何が成果として得られましたか。）

・津島市民、近郊の来場者も含め3500人以上もの来場者が訪れ楽しんでくれた。天王川カフェを始め近隣の店舗にも街にも賑わいを創出できた。

・アンケートによると「今回のイベントで初めてレースの歴史を知った」という意見も寄せられ、周知活動の成果が徐々に見られつつある。

・アンケートでは「家族友人からイベントのことを知った」という結果も多く寄せられ、イベント前には人々の会話のネタとして、現場では「家で待っているおじいちゃんに写真を送ってあげる」との声も聞かれ、家族をつなぐネタとして、イベント後にはSNS上で「来ていたのですか？私もいました。ぜひ今度は」といったネット上からリアルなつながりへのネタといった、イベントの話題があらゆる場面で人々をつなぐネタとして機能したことは嬉しい限りである。

・住民・来場者・参加者も含めとても和やかなムードで進行し、各地イベントに顔を出す機会も多いバイクメディアの取材陣からも「これほど住民との距離が近く穏やかで雰囲気の良いバイクイベントは見たことがない」と称賛された。またネット上で「世界でいちばん平和なバイクイベント」との評も受けた。
このように各メディア押しなべて好意的で、事前告知では、朝日新聞・中日新聞、MrBG誌面、Yahoo!ニュースでも扱って頂き、イベントレポートでは、中日新聞・読売新聞、モーサイWeb、CLATCHマガジン他、数誌で掲載された（予定含）。
バイクイベントがその歴史的経緯も含めてこれほど新聞紙上や誌面で扱われるのは稀であり、このコンテンツの持つ魅力やポテンシャルの高さを強く感じさせると共に、津島市民と歩んできた歴史の深さを再認識することとなった。

・ガイドボランティア、コンシェルジュの方々も来場されたり、他の夢まち事業の写真企画のインスタにアップされたりと団体・事業の壁を越えたつながりも生まれつつある。

・かつてレースに選手として参戦された方から当時の賞状と写真をお譲りいただいた。これは津島市の後世に残すべき史料であると判断し図書館に寄贈した。
寄贈写真の一部は、来年出版の津島歴史写真集４輯に収録予定となった。

・アンケートからも来年以降も継続の希望を寄せる津島市民の期待度の高さも強く感じる結果となった。

4　事業実施上の工夫（事業の目的達成のため、特に創意工夫した点は。）

・展示車両をビンテージバイクの中でもレースの開催されていた昭和 42 年までの製造型式に絞り（中には実際に天王川を走っていて、66 年ぶりに帰郷した車両や津島の倉庫で発見された車両も）より歴史的な意味合いの深いものとした。
今後も津島という土地と関わりのある車両を発掘していきたい。

・バイク＝怖いというイメージを払拭するため、まるで当時にタイムスリップでもしたかのような衣装を身に纏い、バイクに直接興味がない人でも見ているだけで楽しめるような華やかさを演出した。

・博物館展示のように飾るだけでなく、一緒に撮影したり操作方法などを質問したり、参加者とも自由に交流できる場とし、参加者・住民・来場者たちが、世代・性別も超えみんなが楽しめる空間を天王川公園を中心に創出しようと努力した。

5　事業実施上の反省点（具体的な反省点は。）

・まずは、嬉しくも想像以上の賑わいであったための圧倒的なマンパワー不足と、コロナ禍の情勢変化・100 周年事業とのコラボ変更など準備期間の短さも反省点である。

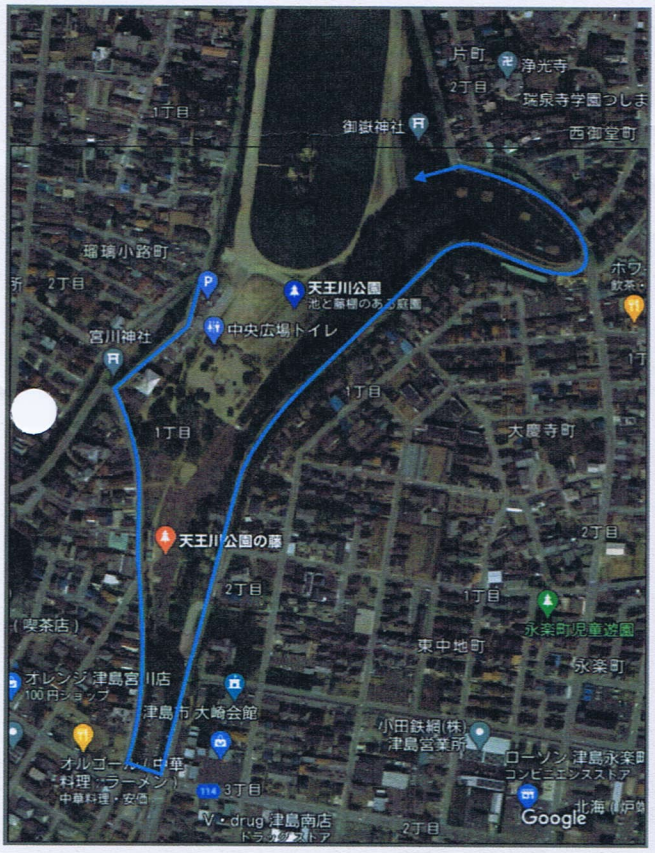
・次回以降は、撮影展示場・パレード共に公園空間をより広く活用し、人々の密を避け、パレードの安全性を高めていく必要がある。

・駐車スペースの確保・混雑も、近隣公共施設（学校など）も視野に入れ協力を要請していく必要がある。また警備員・ボランティアなどの誘導員の確保も考えていく必要がある。

・来場者から「昼食の場所」を尋ねられることも多々あり、観光センターや地元飲食店と協力し昼食マップの様な情報提供をしていく必要がある。それにより賑わいの輪を拡げ地域の活性化につなげていきたい。

・予想どおりではあるが、20 代特に若い女性の来場が少なめであった。今後はこの若い女性層の心に刺さるような展開も考慮しながら、幅広く当イベント・津島のブランディングに取り組んでいきたい。

★ビンテージバイクのように永く皆に愛され 100 年後も続くイベントとなるよう、大切に育てていきたい。



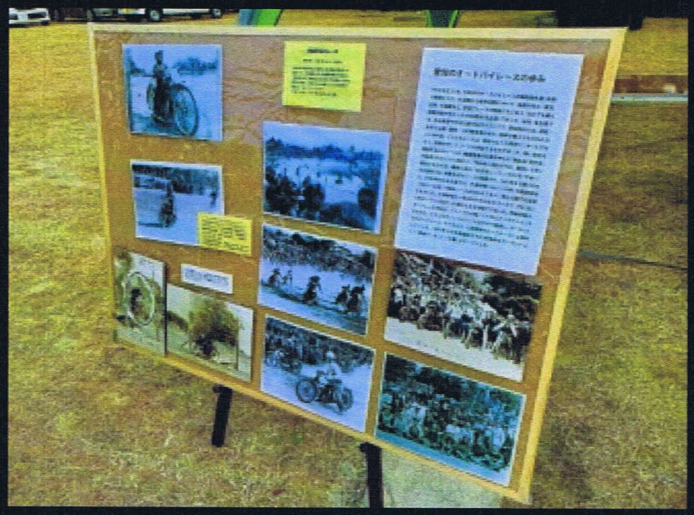
駐車場は東側にあります。

誘導員にしたがってください

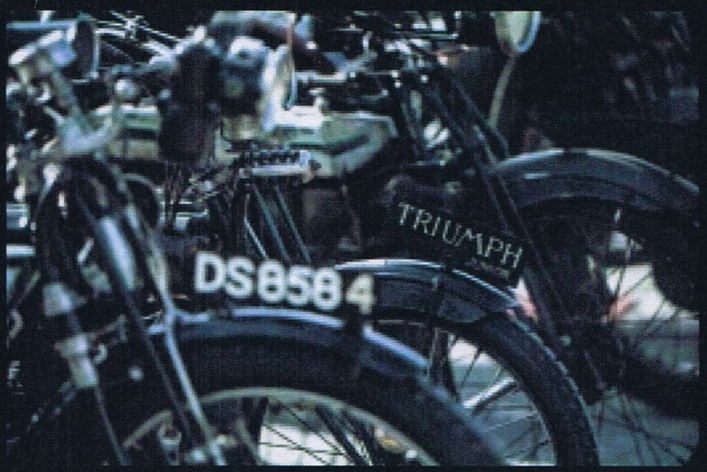
のぼり

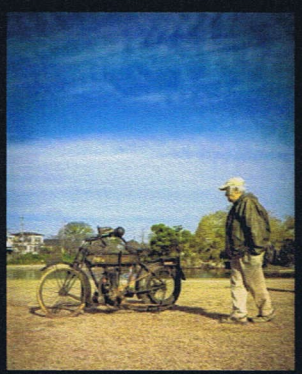
A1パネル

A5展示プレート



展示史料の数々





会場風景

新聞　第3種郵便物認可

よみがえれ 津島オートレース

29日 天王川公園で催し

昨年10月に開いた旧車によるイベントで集まった愛好家たち＝津島市の天王川公園、鳥越誉広さん提供

かつて天王川公園であったオートバイによるレース＝1955年11月、津島市立図書館提供

大正から昭和40年代にかけて、オートバイのレース会場にもなっていた津島市の天王川公園で29日、当時を再現するイベントが開かれる。トライアンフやメグロといった旧車30台あまりが集結し、デモ走行を披露し、独特のエンジン音を響かせる。

同公園は今年、開設100周年。市は今月、週末ごとに記念事業を開いており、その一つとして企画された。

実施するのは、古いオートバイ「旧車」の愛好家たちによる「わっかプロジェクト。」。主宰する鳥越誉広さん(35)＝津島市＝は、オートバイを使ったまちおこしを試みている。

念頭にあるのは同公園で開かれていたオートレース。1926(大正15)年に初めて開かれ、1967(昭和42)年まで続き、市内外から大勢の見物客が詰めかけた。

鳥越さんは昨年と一昨年、仲間らと、旧車に乗って津島神社に集まるイベントを開いた。

将来は天王川公園で実際にオートバイを走らせてみたいと願っていた。今年は、市の主催事業となったことから本来、禁止されている公園内での走行ができるようになった。鳥越さんは「思いがけず夢が実現することになった。かつて津島でレースが盛んだった時代を知ってもらい、オートバイへの理解を広げたい」と話している。

大正から昭和40年代に盛ん

旧車集結 装いも当時を再現

当日は30台以上が集まる予定。いずれも戦前から昭和40年代にかけての旧車で、最も古いのは24(大正13)年式の米国製のインディアン。

コースは同公園内にある池の周囲の一部約200㍍。午前11時と午後1時半のそれぞれ1回ゆっくりとデモ走行をする。装いは当時のレーサーのファッション。希望者との記念撮影も予定している。

市は現在、公園の運営を民間業者に将来、委ねるための社会実験として利用人数とニーズをアンケートで調べている。その一環で毎週木、土、日曜日にはクレープや団子、カレーなどを提供する露店も出している。市の担当者は「『密』になりにくい屋外でのイベントなのでぜひ訪れて、市が誇る公園での休日を楽しんで欲しい」と話している。

時間など問い合わせは、市観光協会(0567・28・8051)へ。

(白井晴仁)

2020/11/15 朝日新聞

新聞　(第3種郵便物認可)

年代物バイク 天王川公園走る

かつての「聖地」に40台

津島

かつてオートレースの聖地だった津島市の天王川公園で二十九日、年代物のビンテージバイクが大集合し、実際に走行する催しがあった。一日で三千五百人もの観客が集まり、半世紀ぶりの熱気がよみがえった。

(伊勢村優樹)

同園では大正期からバイクレースが行われていた。一九六七年で打ち切りとなったが、プロも参戦し、最盛期には十万人が観戦する盛況ぶりだった。今回の催しは、同園開設百周年記念イベントの一環で、「津島をバイカーの聖地に」をスローガンに地域活性化を行う団体「わっかプロジェクト。」が企画した。

三四年型ハーレー・ダビッドソンなど、県内外の愛好者が所有する自慢の名車計四十台が集結。最も古いのは一一年式で、ハーレーの商用車やイタリア・モトグッチの軍用車もあった。

レースはせず、往年のバイカーの格好をした愛好者が、コースだった丸池周囲の一部約百五十㍍を、午前と午後にパレード走行。観客たちは小気味よいエンジン音を響かせる名車を写真に撮りながら楽しんだ。「カーブでは畳で補強した壁に激突することもあった」と、激しさと熱狂に包まれた当時の雰囲気を懐かしむお年寄りの姿もあった。

団体の鳥越誉広代表(三五)は「皆が拍手を送ってくれ感無量。昔は競馬や車のレースもあり、今後も眠っていた催しの復活を通じて地域おこしができればと話した。

上集結したビンテージバイクと愛好者たち　下多くの観客が詰め掛ける中、ビンテージバイクを運転する愛好者たち＝いずれも津島市の天王川公園で

キツネが通る通路 地元住民らが見学

豊田自動織機東浦工場

野生動物が通り抜けられる通路「アニマルパス」を工場敷地内に設け、キツネの家族が通ることで話題になっている東浦町緒川の豊田自動織機東浦工場で二十六日、同町の神谷明彦町長や地元住民向けにアニマルパスの見学会があった＝写真。

アニマルパスは、開発によって野生動物の生息地域が分断されるのを防ぐ小道。同工場は二〇一八年に

この連載が回ってきて、真っ先に頭に浮かんだのが

2020/11/30中日新聞

今回、津島市立図書館に寄贈した賞状2点と写真16点